

## 私のたまごやき

落合小学校 四年

にし ひまり  
西 陽莉

「ひまちゃん、いつものおねがいます。」  
とリクエストされると、私の特せいたまごやきが食たくにならぶ。

「上手にまけてる。」

「おいしそう。」

と家族みんながほめてくれる。黄色のふんわり大きなたまごやきは、ほんのりあまくて、少しようゆがかくし味になっている。

初めてたまごやきを作ったのは、四才の時だった。お母さんに教えてもらって作ったたまごやきは、頭にうかんだものとは全然ちがって、スクランブルエッグのようだった。それでも家族のみんなは、

「上手だね。」

「ふわふわでおいしそう。」

と笑顔で食べてくれたことを、今でもおぼえている。それから、私は料理をすることが好きに

なり、いためものやフルーツポンチを作ることがふえた。包丁も使えるようになり、野菜や果物を切るなどのお手伝いもふえた。料理をする時に、こぼれてしまったり、こけてしまったり色々な失敗もあったけど、その度に、家族は、  
「大じょうぶ、大じょうぶ、問題ない。」

と言ってくれる。失敗も大事な言いけんと、はげましてくれることが、私の力となっている。

お父さんが幼いころ、おばあちゃんに作ってもらったたまごやきが思い出にのこっていて、私のたまごやきを食べると大好きだったおばあちゃんと重なるそうだ。おばあちゃんは、この四月になくなった。長いあいだ、しせつにいて、会うこともほとんどなかったけど、ビデオや写真を見返すと、一緒にくらしていたときおばあちゃんと私がいて、やさしく頭をなでくれたり、私がおばあちゃんのかみの毛をくしでとかしてあげたりしているすがたがうつっていた。

わたしは、料理を作ることが多くなった。その中で、たまごやきにかくし味を入れることを思いついた。

「今日のたまごやきは、かくし味のしょうゆが入っているんだよ。」

と言ってたまごやきを出した。すると、お父さんが、

「おいしい。そういえば、ひいおばあちゃんのたまごやきにも、しょうゆが入っていたな。」と言った。私はおどろいて、うれしくなった。

私はおばあちゃんのたまごやきを食べたことはないけれど、実はおばあちゃんもさとうとかくし味のしょうゆを入れていたと聞いて、知らないうちに同じ味が受けつがれていたんだと思うと、うれしい気持ちになった。

夏休み、五才の弟がたまごやき作りを始めた。私は失敗もけいけんと見守りながら、このたまごやきをずっと守っていききたいと思う。